甲第 210 号証

msn 産経ニュース

「明確な活断層だ」「まだ断定できない」…大飯原発会合詳報

2012.11.5 01:15

関西電力大飯原発（福井県）の敷地内断層について4日、議論した原子力規制委員会の専門家調査団。「明確な活断層だ」「まだ断定できない」。同じ地層でも見解は分かれた。3時間近く議論が続いた会合での調査団メンバーの主なやりとりを再現した。

《冒頭、調査団が2日の現地調査で撮影した試（し）掘（くつ）溝（こう）壁面の写真などが示された。渡辺満（みつ）久（ひさ）・東洋大教授が調査終了後、「F-6断層（破砕帯）」の延長とみられる断層を確認したと明らかにした場所だ。概要説明の後、メンバーが意見を述べた》

広内大助・信州大准教授「関西電力は断層は地滑りによるものと説明しているが、地滑りと断定するのは難しい。トレンチ（溝）の上が見えないので、奥へ掘り下げて確認する必要がある」

《関電の地滑り跡との説明に懐疑的な見方を示す。さらに、沖合の海底を調べた音波探査データについて指摘した》

「何も断層は見られないとなっているが、筋状の構造が見える。これをみて何もないと判断するのは難しい。断層の可能性もあると思っている」

重松紀生・産業技術総合研究所主任研究員「破砕帯だけで判断しろというのはむちゃな要求だと思っていた。断層粘土だけで判断するのはかなり難しい」

《重松氏は、活断層かどうか判断するには、地下の層にどのように力が加わっているか調べ、破砕帯を構成する物質を分析する必要があると強調した》

渡辺氏　「これは活断層であると判断した。大飯原発の最重要施設の直下に活断層は存在する。F-6以外にも活断層が存在する。これらが見落とされ、現在になって問題が顕在化した。これまで確認できないことを『活動していない』とごまかしてきた」

《断層の危険性を指摘し続けてきた渡辺氏が主張するように活断層だとすれば、大飯原発が運転停止に追い込まれるのは必至だ》

「あえて言うと、『結論はまだ早い』『慎重に』という意見はいらない。これはのんきな学術調査ではない。原発ををすぐに停止し、調べ直すのはその後でやるべきだ」

岡田篤正立命館大教授「学術的に冷静な対応が必要だ。全体として、まだこれを活断層ということができない。状況証拠、調査中のものもある。場合によっては、地滑りの専門家ら学会の幅広い識者を含めて分析すべきだ。私はあえて『ずれ』と言っている。断層運動と即断はできない。むしろこのような構造は地滑り的に見える。局所的な現象だけで、先走って結論づけるのは

非常に危険だ」

《活断層かどうかの判断をめぐり見解が分かれた。一方、地層のずれが生じた時期については、4人の見解がほぼ一致した》

広内氏「12万5千年くらい前と考えると、その判断がおかしいとは思わない」

《断層の活動時期が13万～12万年前の「後期更新世」以降のものが「活断層」とみなされてきた。団長役を務めた原子力規制委員会の島崎邦彦委員長代理が内容を整理した》

島崎氏　「（地層のずれは）12万5千年前以降のものとみられる。それが活断層によるものと考えても矛盾はないが、地滑りの可能性がある。それは一致した結論である」

© 2012 The Sankei Shimbun & Sankei Digital

© 2012 Microsoft | Microsoft